巻 頭 言

～この頃思うこと～

会長　大西英之

理事長を退職して1年になる。責任ある立場を退いて一歩下がった視野から、また違った視点から物事を見ると色々違った景色が見えてくる。

コロナ感染の最中は出来なかったことが目白押しに続いている。開院して20年以上たった北館外壁等の改修工事、PACSの更新、新MR装置2台の契約と更新工事、北館3階の改修工事などである。理事長・院長は臨床に忙しいので私が補佐役で担当している。

今年は診療保険改正の年でもあり46名の新入職員があった。組織もだんだん大きくなり300名の職員を数える。

新たな視野に立って10年、20年後のことを想定してみると色々な展開が考えられる。日本の超有名大企業が倒産に近い整理企業になった例も多々見受けられる。アメリカ有数の企業でかっては世界一の鉄鋼企業であったUSスチールが今では27位と低迷し、日本製鉄に買収されようとしている。アメリカのラストベルト地帯の鉄鋼関係労働者数は8万人から今では3000人に激減し、ロウソクの火が消える寸前の状態という。GAFAで代表されるIT関連企業が国境を越えて発展している一方で国家の礎ともなる重厚長大企業が瀕死の状態である。医療も一つの産業と考えれば国家の礎ともなるべき企業である。今年の診療報酬改定を視ても先行きは暗い。医療従事者は3Kともいわれる職業であるが、医療をすることの喜びや誇りが無ければやっていけない。

視角を変えてみると病院内の医務部、看護部、医療技術部、事務部それぞれの強みや弱みが見えてくる。理事長交代のこの時期に「見える化」をルールに乗せることを試みてはいるがなかなかハードルが高い。企業の栄枯盛衰を視ていると当の本人達は十分理解しその時々に対応していたと思われるが結局は倒産に追い込まれている。その理由は何か？私見ではあるが、それはその組織のトップの責任が9割、その組織のトップをフォローする職員の危機意識とチームワークの欠如が1割と思っている。その組織が一丸となって順調な時にも常に危機意識を持っているかということが生死を決める。厳しい冬山での行動が然り、大洋に乗り出した帆船が然りである。

院長以下、職員の皆さんには医療を通じて是非誇りや喜びを感じ取って欲しい。そして、そこに生きがいを見いだして欲しい。その時にはきっと本人も病院も明るい未来が見えてくると思う。